

古江西第1号貝塚発掘調査報告

—広島市西区古江西町884番地所在遺跡の調査—

1983

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I.はじめに	(1)
II.位置と環境	(2)
III.遺構の概要	(4)
1. 調査の概要	(4)
2. 層序	(4)
3. 遺構	(6)
IV.出土遺物	(17)
V.まとめ	(28)

例 言

1. 本書は広島市西区古江西町における宅地造成工事に伴い、昭和57年8月から10月にかけて実施した古江西第1号貝塚の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は三井不動産株式会社から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書の執筆、編集ならびに出土遺物の整理・実測・製図・写真撮影については、三枝健二がこれを行った。
4. 本遺跡より出土した貝類の同定については、広島大学理学部付属向島臨海実験所所長 稲葉明彦（理学部教授）氏の御教示を得た。記して謝意を表したい。
5. 本書に使用した遺構の表示は、S B：住居跡・建物跡、S D：溝状遺構、S K：土壙、S X：その他の遺構である。
6. 出土遺物の縮尺は原則として次の通りである。石器 $\frac{1}{2}$ 、土器 $\frac{1}{3}$ 、石製品及び鉄器 $\frac{1}{2}$ 。
7. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（広島）を使用したものである。

挿 図 目 次

第1図 古江西第1号貝塚位置図 (1:50,000)	(1)
第2図 周辺地形図 (1:5,000)	(3)
第3図 土層断面図 (1:80)	(5)
第4図 透構配置図 (1:160)	(7)
第5図 S B 1～S B 4 実測図 (1:60)	(8)
第6図 S B 7 実測図 (1:60)	(9)
第7図 S B 9 実測図 (1:60)	(10)
第8図 S D10～S B22実測図 (1:60)	(11)
第9図 S B23, S D24実測図 (1:60)	(12)
第10図 S B32～S X45実測図 (1:60)	(13)
第11図 貝層及びS D46・47実測図 (1:60)	(14)
第12図 S K 8 実測図 (1:40)	(15)
第13図 S K41実測図 (1:40)	(16)
第14図 出土遺物実測図 <1> (2:3)	(18)
第15図 出土遺物実測図 <2> (2:3)	(19)
第16図 出土遺物実測図 <3> (1:3)	(20)
第17図 出土遺物実測図 <4> (1:3)	(21)

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	(23)
第2表 県内円面鏡出土土地名表	(30)

図 版 目 次

図版 1 a 造景 (南西から)	
b 調査前近景 (西から)	
図版 2 a 造構検出状況 (南から)	
b 造構検出状況 (東南から)	
図版 3 a 4区貝層及びS D46・47検出状況 (南から)	
b 4区貝層及びS D46断面 (南から)	
図版 4 a 2区S B 1検出状況 (北から)	
b 2区S B 1完掘状況 (南から)	
図版 5 a 2区住居跡群検出状況 (西から)	
b 2・4区住居跡群検出状況 (北から)	
図版 6 a 3区造構検出状況 (東から)	
b 3・4区造構検出状況 (南から)	
図版 7 a 2区S K 8 遺物出土状況	
b 2区S B17円面鏡出土状況	
図版 8 出土遺物	
図版 9 出土遺物	

I はじめに

古江西第1号貝塚の調査は広島市西区古江西町における宅地造成事業に起因するものである。当遺跡については、昭和57年5月、広島市都市整備局から広島市教育委員会(以下市教委)宛に、当該地における宅地造成の許可申請に伴う照会があり、これを受けて同月、市教委が現地踏査を実施し、貝塚の存在が確認された。

遺跡の取扱いについては、起業者側である三井不動産株式会社は宅地造成工事の実施を強く要望し、そのため遺跡の事前調査の早急な実施を望んだ。しかし、工期及び調査体制等の問題から、市教委ではこれにすみやかに対処し得ない状況にあった。このため、昭和57年7月、業者から県教育委員会(以下県教委)に問題解決の検討が要請され、県教委は市教委と協議のうえ当(財)広島県埋蔵文化財調査センターと協議の結果、スケジュールの調整が可能であったため調査を受託することとした。

昭和57年8月、起業者及び(財)広島県埋蔵文化財調査センターとの間で当該予定地における発掘調査委託契約を交すとともに、文化庁長官宛に発掘届を提出、同年8月18日から10月30日まで延べ46日間にわたり調査を実施した。調査面積は約520m²である。

なお、調査にあたっては三井不動産株式会社、広島県教育委員会、西部開発株式会社、吉田小学校ならびに地元の方々から多大な御協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。



第1図 古江西第1号貝塚位置図 (1:50,000)

1. 古江西第1貝塚
2. 草津城跡
3. 小茶臼山城跡
4. 桐木城跡
5. 鬼ヶ城跡
6. 鈴ヶ峰城跡
7. 狐ヶ城跡
8. 高井貝塚
9. 高井3号道路
10. 高井箱式石棺
11. 高井2号道路
12. 利松住吉貝塚
13. 和田1号道路
14. 和田2号道路
15. 下沖2号道路
16. 下沖5号道路
17. 下沖4号道路
18. 下沖3号道路

II 位置と環境

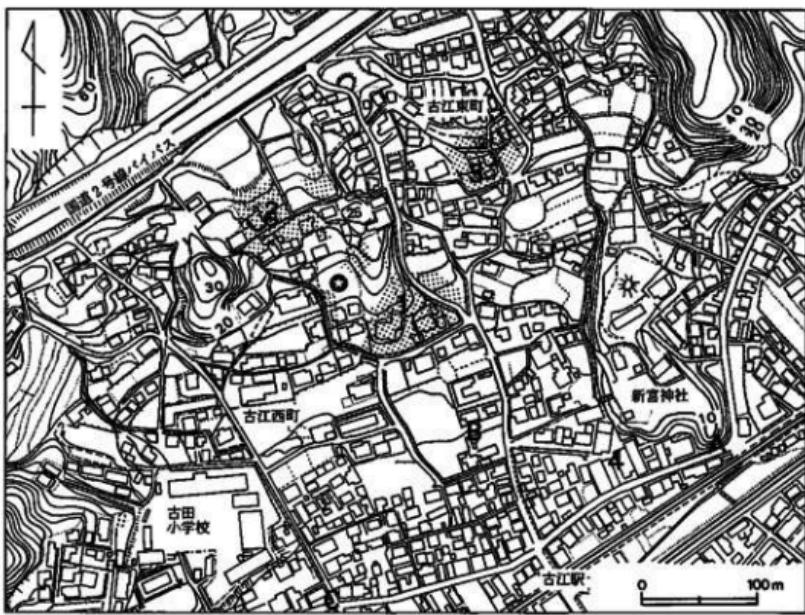
古江西第1号貝塚は、広島市西区古江西町884番地に所在する。この周辺は広島湾西岸で、太田川（太田川放水路）河口右岸に連なる榎木城山（標高339.6m）などの山麓斜面の裾部にあたる。現在は市街地の一部となっているが20年くらい前から近郊住宅地として、小規模な開発が進んだため、古代山陽道沿い、または旧太田川河口付近を中心とした湾岸地域などに比べ、残存する遺跡数は少なく、背後の山塊上に中世山城が分布しているにすぎない。現在西岸付近での遺跡は、やや内陸にあたる五日市町の石内川などの河川流域に多く分布する傾向にある。

周辺の遺跡を概観すれば、まず縄文時代では市内比治山貝塚・中山貝塚などがあげられる。次いで弥生時代では中山貝塚・五日市町野登呂遺跡などがある。古墳時代では市内北部の高陽町周辺などで古墳・集落などの調査が多くなされており、周辺では五日市町内で後期古墳などの調査例が知られるにとどまる。奈良時代では、古代、駅館と考えられる安芸郡府中町下岡田遺跡のほか、道隆寺跡、市内の光見寺廃寺跡などがあげられる。平安時代には佐伯郡廿日市町速谷神社、宮島町嚴島神社などが勢力を拡大した。特に嚴島神社は平氏の攝頭とともに、多くの莊園を持つこととなる。山陽道は安芸駅（府中町）から太田川を渡り、伴部駅（広島市安佐南区沼田町伴）などから五日市町石内付近を通り、種籠駅（廿日市町平良）へ至っている。

中世になると、太田川中下流域を武田氏、広島湾西部が嚴島神主家の勢力下におかれた。また五日市、廿日市、宮島などが市場、港湾として発達してゆく。その後、大内氏などの支配を経て、毛利氏による支配の確立をみるとこととなる。

古江西第1号貝塚については、神尾明正氏による広島湾岸の貝塚についての報文⁽¹⁾にみられる。

本遺跡周辺の古江西町から古江東町にかけて存在する貝塚の分布をみれば、第2図に示す様な分布を示している。その状況は、現状では1～3地点に大きく3個所に分かれて分布し、いずれも混貝土層が露出している。特に1地点では小丘陵東側斜面に純貝層がみられる。貝の種類は二枚貝が中心となり、カキなどもみられる。本遺跡の貝層も、これら一連の貝塚の一部にあたるものと解される。これらは標高6mから30mの間に、東西約250m、南北200mにわたって分布している。また図中A、B、Cは、昭和初期の災害時における満潮時の水位を示したもので、新宮神社のある丘陵先端部から、古田小学校跡までの、標高2～3m付近に波打際のラインが認められたとの事である。A-Cに通じる道が旧街道にあたり、また、4地点からも貝層が検出されている事から、一概にはいえないであろうが、「古江」という地名の由来と共に、古代～近世における旧海岸線を推定するうえで、ひとつの目安となるものと思われる。



第2図 周辺地形図 (1 : 5,000)

●は古江西第1号貝塚

1~3アミ目部分は貝層の分布状況

(註)

(1) 神尾明正「広島市付近先史貝塚出土類目録」『史前学雑誌』第12巻4、5、6、合併号 1940年他

III 遺構の概要

1. 調査の概要

本遺跡は前述の様に背後に連なる山塊の山麓裾部に派生した緩やかな傾斜面にあり、突出する小丘陵に挟まれた部分にあたる。南側は既に宅地造成により失われ、包含層が露出する状態であった。調査に先立つこの崖面観察では両方の丘陵からの緩い傾斜によって形成された小規模な谷状の窪みが観察された。遺構もこの傾斜面に沿って散見されたが、大きく3方向の傾斜面を平坦に造成しているため、その遺存状況は悪いものと考えられた。

調査にあたっては、先の崖面観察によって得られた数時期にわたる遺物の、各時期の包含層の検出と、遺構の遺存状態並びに旧地形面の把握を行うため、調査区中央に、ほぼ東西、南北方向にトレンチを設定、無遺物層までの掘下げを行った。その結果、大きく北から南にかけての傾斜と、小丘陵からのものと考えられる東西方向からの緩い傾斜を確認、その旧地形面上で多数の遺構を検出した。

このため調査区中央にあたる先述のトレンチ交点を基点として、調査区を4分割する基線を設け、北東部を1区、南東部を2区、北西部を3区、南西部を4区として掘下げを行った。

その結果、近世、中世及び古墳時代～奈良時代にかけての包含層を、また最下部に於ては縄文時代～弥生時代の遺物も確認された。しかし遺跡が傾斜面に位置し、各時期の遺構が複雑に重複、平坦に削平されていることから、層位的な検出は困難であった。このため原則として旧地形面（漸移層上面）を遺構検出面として調査を行った。

2. 層序

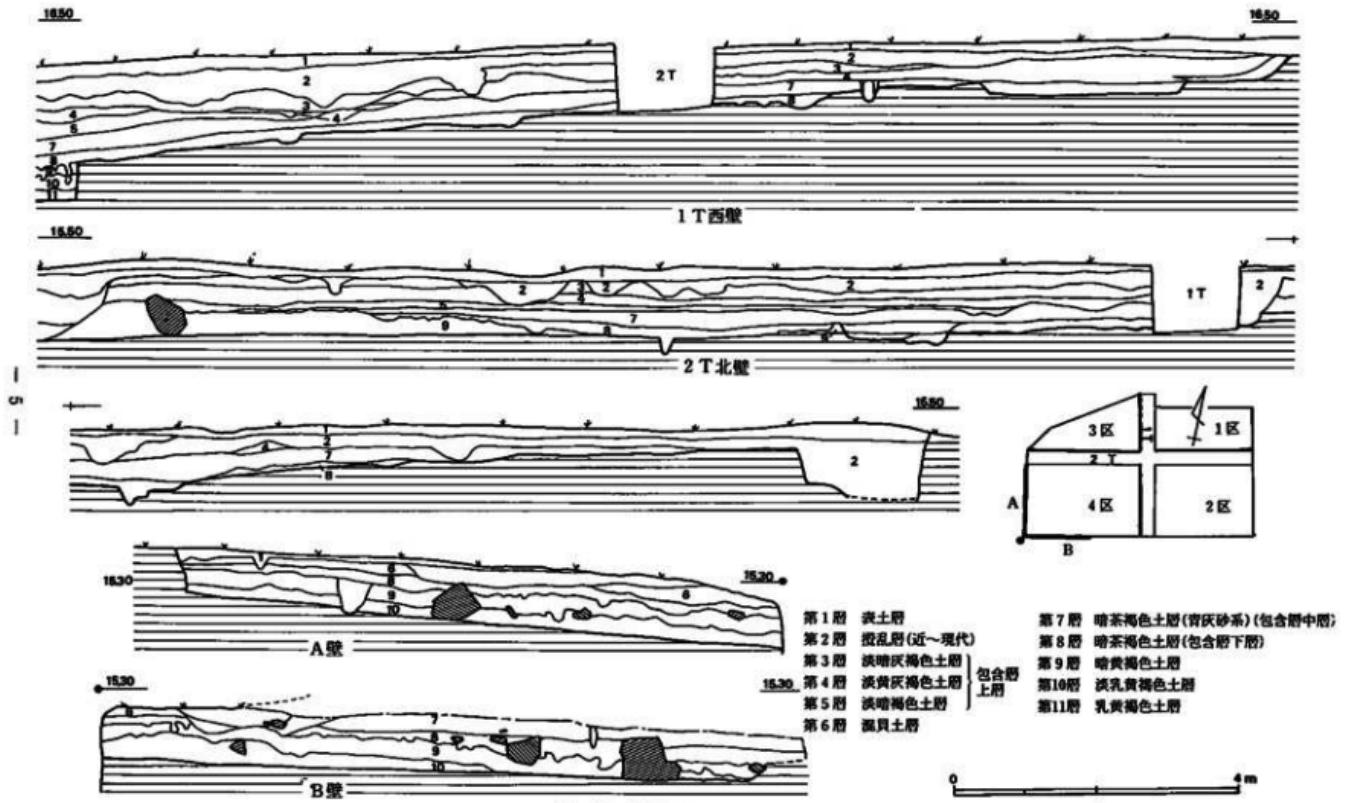
ここでは、1T北壁、2T西壁、並びに調査区南西コーナーのA・B壁（第3図）を中心に、その基本的な層序関係を述べる。

第1層 現表土層

第2層 混乱層。調査区のほぼ全域に広がり、近～現代遺物を多数含む。1・2区東辺の搅乱部分及び、調査区全体に散在する径1～2m程の土壌なども同層位から掘込まれたもので、下部からは近代陶器類が出土した。1T西壁でみれば、ほぼ水平堆積を示している。

第3層 淡暗灰褐色土層。旧表土にあたる土層と思われ、やや有機物を含む。近世遺物を含む。第3層面により削平されており広域には認められない。

第4層 淡黄灰褐色土層。1T及び2T西半で、ほぼ水平に近い堆積状況を示して検出。近世遺物を多く含む。2区近世遺構群（SK25～SX27, SX30）などは、本層位もしくはその上面から形成されており、その下面是近世生活面の一時期として把えら



第3図 土層断面図 (1:80)

れる。

- 第5層 淡暗褐色土層。1T南半、2T西半で検出。1T南半でみれば傾斜地形の低位に向って厚く、また高位に向っては徐々に薄くなり、途切れている。またこの下面は旧地形面の傾斜に近い傾きを保っており、本層位形成期には、旧地形の傾斜が残されていたものと考えられる。
- 第6層 混貝土層。第7層上面に形成された土層（貝層）で、混土貝層と混貝土層及び暗茶褐色土層との小さな互層状を成す。調査区西南部分で認められたのみである。近世～中世の土器細片が出土している。
- 第7層 暗茶褐色土層。全体に青灰色味を帯び、バイラン粒を含む泥質の砂層で、調査区のほぼ全域にわたり検出された。旧地形に沿った斜面堆積土層で、中世の遺物を多く含む。SD28はこの層の下面から掘込まれており、本層位上～下面が中世遺構面にあたるものと考えられる。
- 第8層 暗茶褐色土層。土質は第7層と同様バイラン粒を多く含む砂泥質で、それに比べ有機質が多く黒味を増す。上半（暗茶褐色）と下半（脱色氣味の黒褐色）の土層に分かれ、主に上半で古墳時代～奈良時代の、下半で縄文・弥生時代にかけての遺物が出土している。
- 第9層 暗黄褐色土層。漸移層にあたり、上・下面是不整合面を成す。土質はバイラン土粒を多く含むが黄褐色の粘質土層が主体を成す。本層から以下は無遺物層で、ここでいう『旧地形』の最上面にあたる。
- 第10層 淡乳黃褐色土層。
第11層 乳黃褐色土層。}ともに花崗岩バイラン土層で、花崗岩礫及び岩塊を含む。

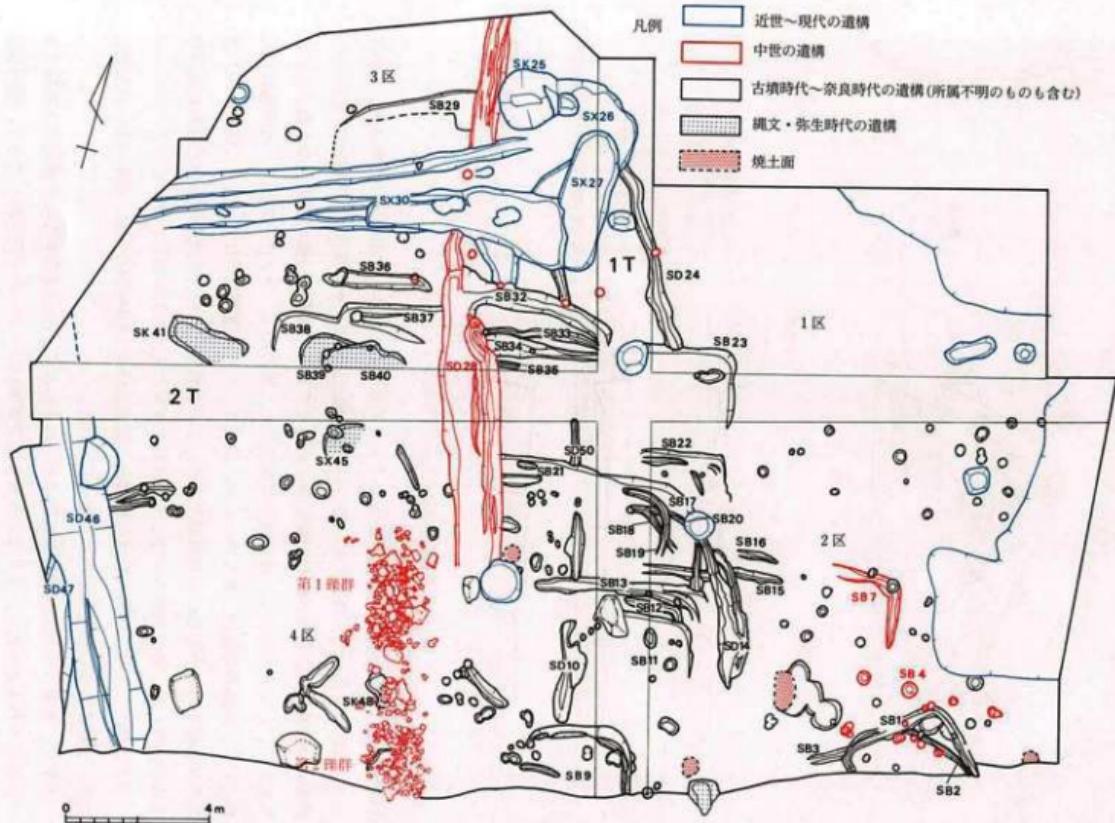
以上が本遺跡における基本的な層序関係である。これを時代別に区分すれば、第5層を中心として第3～5層が近代各期の生活面を含む（包含層上層）。次いで第7層が中世期の生活面を含み（包含層中層）、第8層では縄文・弥生時代と古墳時代～奈良時代の各期の生活面を含んでいる。（包含層下層）。これらは最も残りの良い3区南半で現地表までの層厚が1mを越えるものの、調査区上半では20cmに満たない状況であった。そのため各時期の遺構面の遺存度は悪く、包含層中～下層の遺構群の掘込み面は、次期生活面の形成に伴い、失われる結果となっている。

3. 遺構

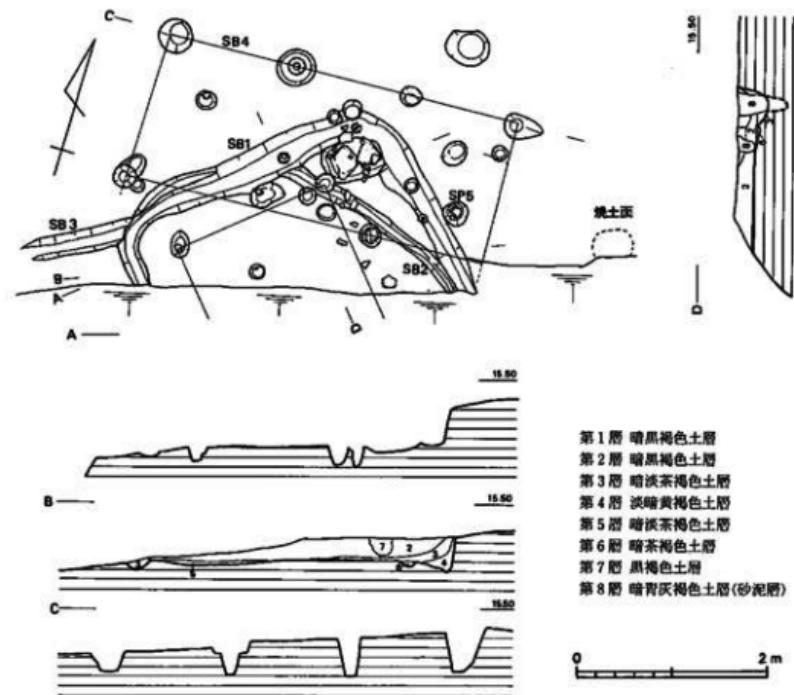
住居跡・建物跡

S B 1 (第5図)

2区南東部に位置し、S B 2・3・4と重複している。南半は既に失われていたが、その遺



第4図 遺構配置図 (1 : 160)



第5図 SB 1～SB 4実測図 (1:60)

存状況から1辺約3.30mの隅丸方形を呈するものと考えられる。壁面はほぼ直角に掘込まれており、西側は斜面のため遺存状態が悪いが、北辺部では検出面から床面まで約40cm前後を計る。壁際には幅約30cm、深さ10cm程の側壁溝を廻らせており、床面は一部に貼床状の土層がみられるものの、ほぼ平坦である。柱穴は2本検出され、径約20cm、深さ10～20cmで、柱間隔は1.70mを計る。炉跡等は検出されなかったが、北東コーナー側壁溝及び柱穴に接して60×45cm、深さ約10cm程の浅い不整形の土壙が検出され、その上面で花崗岩自然礫製の台石と思われる石材2点が出土した。その状態から推して、台石を固定するための施設とも考えられよう。

出土遺物としては、床面及び台石周辺から須恵器杯身(第16図37, 38)、高杯(39)が出土した他、斐体部片並びに土師器小片が出土している。

SB 2, SB 3は共に側壁溝の痕跡をとどめるのみで、出土遺物もなく所属時期も不明である。共にSB 1より古く、SB 2はSB 1北壁西側にコーナーの一部を残しており、梢円形に近い平面プランを有するものとも考えられる。またSB 2東側の崖面寄りで焼土面を検出した。

SB 4 (第5図)

2区南東部に位置し、SB 1に重複している。南側が失われているため、現状では1間(1.6m)×3間(3.75m)の規模をもち、主軸方位をN90°Wにもつ獨立柱建物が想定される。

柱穴は東南隅部分が崖面にあたるため検出できなかつたが、上面径25~40cm程のものが計7個検出された。いずれも検出面から20~40cm程掘込み、壇底面の深さをほぼ一定に保つてゐる。覆土は第7層である。

出土遺物としてはSB 1北辺中央部付近にあたる柱穴底面より白磁皿(第17図56)が1点出土したのみである。

SB 7 (第6図)

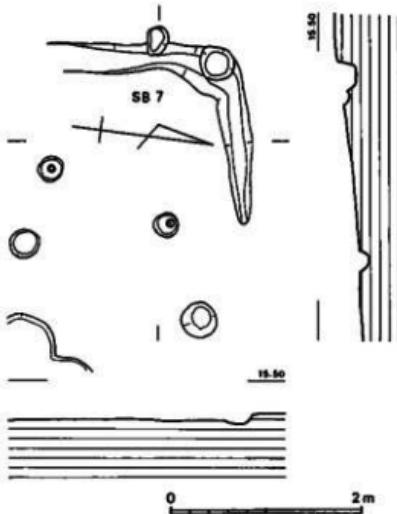
2区のほぼ中央にあり、SB 4北側に位置する。南側と西側に向つた緩い傾斜面にあるため、側壁溝北東コーナー部分を僅かにとどめるのみで、床面も失われており、これに伴うと思われる柱穴は検出できなかつた。溝の幅は上面で約30cm前後、深さは検出面から20cm、コーナー付近床面からは約5cmを測る。覆土はSB 4同様、青灰色気味で砂泥質の第7層が充満しておらず、出土遺物はない。

SB 9 (第7図)

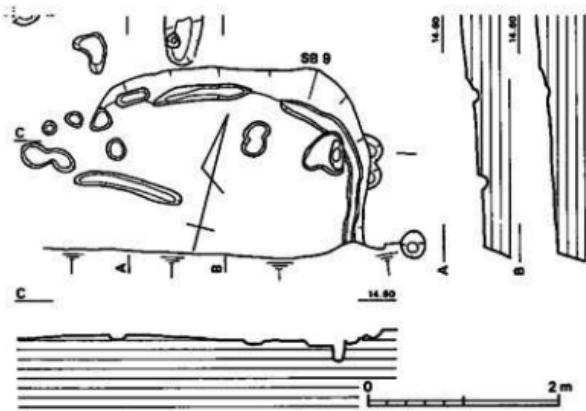
1T南端の2・3区にかけて位置し、南半を失っている。北辺の状況から、1辺約3mの隅丸方形プランが考えられる。しかし、検出面での遺存状態は悪く、壁高も約5cm程しかとどめていない。側壁溝は幅15cm、深さ約5cmで、北辺で部分的に途切れ、不明瞭となっており、柱穴も明確なものは検出できなかつた。また、本遺構床面西南部にも側壁溝の溝があり、崖面以南にも住居跡が重複していたものと考えられる。土師器細片が出土した。

SB 11 (第8図)

2区西辺の、SB 9北側に位置しSB 12、13が重複している。南側に向つた緩い傾斜面にあたるため南北は流出していた。平面プランはやや隅丸気味の方形を呈するものと思われるが、北辺西端部に自然岩塊が存在するため、西辺コーナーは検出できなかつた。壁高は10cmを計り、側壁溝は検出できなかつた。床面の状況は、ほぼ平坦で、須恵器、土師器小片のほか、安山岩



第6図 SB 7実測図(1:60)



第7図 SB 9実測図 (1:60)

剝片、黒曜石碎片なども出土した。また、大小5個のピットが検出できたが、明確な柱穴は認められなかった。

S B 12・13 (第8図)

S B 12は、S B 11北辺上端から約20cm北に隔て側壁溝のみを検出した。側壁溝は北辺及び北東コーナーをとどめ、北西コーナー部分はS B 11同様自然岩塊

の存在のため検出されなかつた。

S B 13はS B 12側壁溝北側に接して、北辺壁及び側壁溝を検出した。平面プランは、北東コーナーの状況から隅丸となるものの、北壁は自然岩塊付近で小さく蛇行し4区まで続き、北辺は全長4.7mを計る。2軒の住居跡の重複とも考えられ、自然岩塊の存在等その性格についても不明な点が多い。

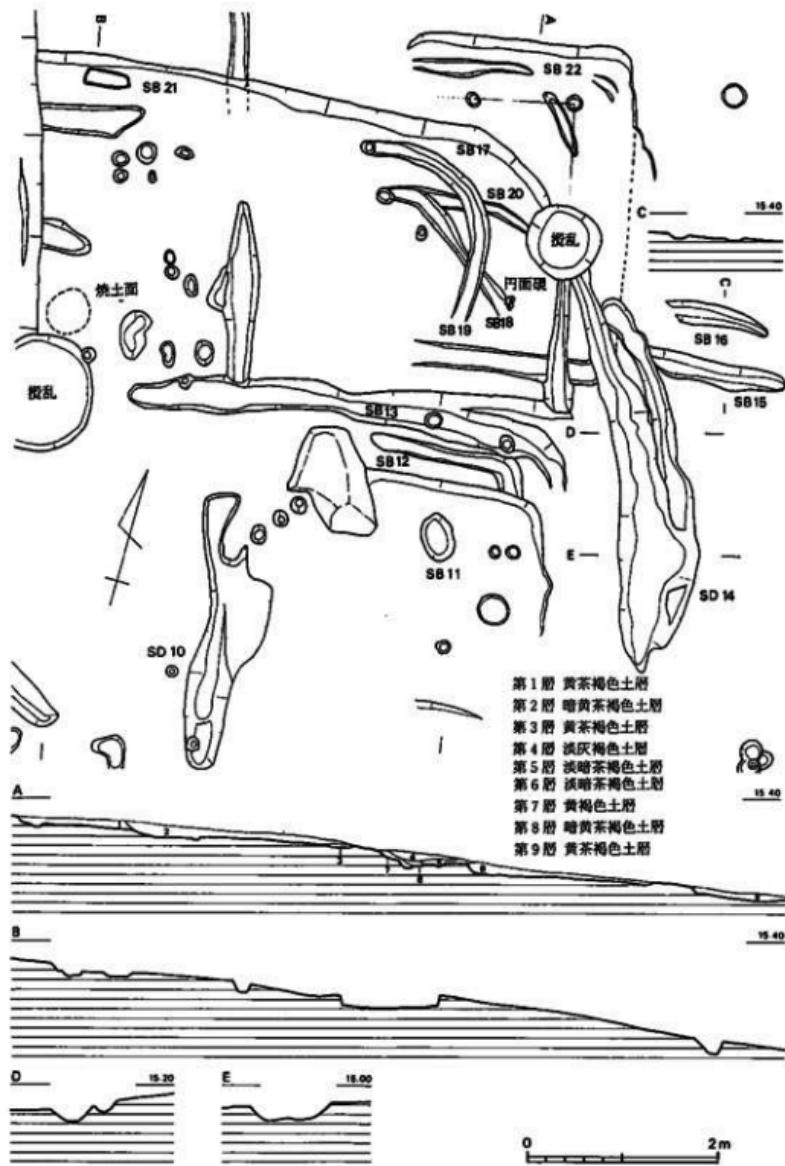
S B 11～13の構築順序は南北土層断面から、S B 11→S B 12→S B 13の順で構築されている。

S B 17 (第8図)

2区西北部にあり、S B 13の北側に位置する。S B 13をはじめS B 15～22、S D 14・50などが複雑に重複する。平面プランは、北東コーナーが攪乱されているため不明確な部分もあるが北辺が4区境で緩く屈曲しS B 21に続き、隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁高は検出面から約15cmを計り、明確な柱穴は検出できなかつた。

出土遺物としては、床面から円面硯(第16図42)、須恵器脚台部、口縁部及び土師器などの細片が出土している。

S B 18～20はS B 17床面で検出し、いずれも幅15cm、深さ3～4cm程の側壁溝痕跡のみであった。S B 15・16同様出土遺物はなく、明確な時期は不明である。S B 21はS B 17と明確な切合を示さず、2・4区の境で北辺に乱れがみられる程度である。明確な側壁溝をもたず、柱穴も判然としない。また西辺部分をS D 28に切られ不明であり、床面南西部で径45cmの範囲で焼土面を検出した。一応S B 17と重複関係をもつ住居跡として扱っておく。



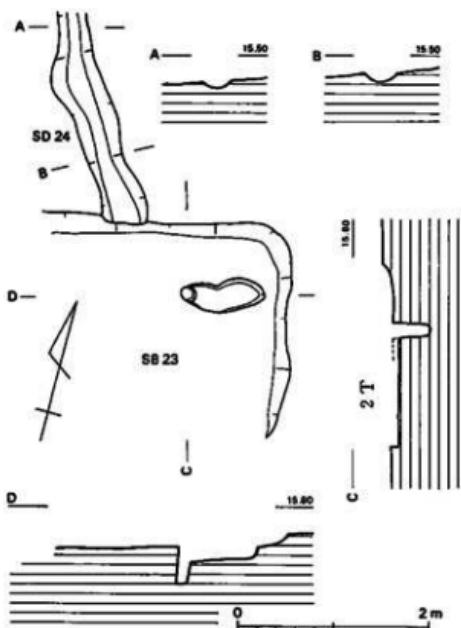
第8図 SD10~SB22実測図 (1:60)

S B22 (第8図)

S B17北側の、2区西北端付近に位置する。南側と西側に向う傾斜のため壁高10cm程度と、その遺存度は悪いが、北辺及び北西コーナーを、また、S B13に近接して南辺側壁溝をとどめしており、南北で3.5cmを計る方形住居跡と考えられる。床面は平坦で北辺側で柱穴2個を検出した。柱間隔は1.1mで、径15cm、深さは5~20cmを計る。側壁溝の遺存は南辺に比べ悪い。

出土遺物としては、覆土中より石錐(第14図1)、安山岩剝片、黒曜石碎片が、床面からは須恵器及び土師器小片が出土した。

これらの住居跡の切合い関係を見ると、まずS B22を切込んでS B17が構築され、次いでS B17側壁溝を切込んでS B13が重複している。またS B18~20はS B17によって削平されており、S D14と住居跡との関係は、擾乱壙のため不明である。



第9図 S B23, S D24実測図 (1:60)

にかけて緩く傾斜する地形にあるため南北を流出しており、西辺部もS D28によって失われている。その遺存状態から、一辺が約4.5mの隅丸方形を呈していたものと思われる。壁高は北辺で約20cmを計り、幅40cm、深さ10cm程の側壁溝が廻っている。床面は平坦で、径15cm、深さ約10cm程度の柱穴2個を検出した。柱間隔は1.4mを計り、その状態から東西に3個配されていたものと考えられる。出土遺物としては床面及び覆土中から須恵器、土師器片のほか安山岩剝片

S B23 (第9図)

1区西南端から2区にかけて位置する。西南方向へ向う緩い傾斜面にあたるため、南及び西壁を失っており、現状では隅丸気味の方形を呈するものと思われる。壁高は約10cmで、側壁溝を持たず、径約15cm、深さ40cmの柱穴1個を検出した。出土遺物としては、土師器細片、安山岩碎片1点が出土したのみである。

S B29 (第4図)

3区北半で検出。S X30及びSD 28によって切られており、削平も著しく、幅30cm程度の側壁溝の痕跡が確認されたのみで、柱穴は検出できなかった。須恵器細片が若干出土している。

S B32 (第10図)

3区東南端付近に位置する。南側にかけて緩く傾斜する地形にあるため南北を流出しており、西辺部もS D28によって失われている。その遺存状態から、一辺が約4.5mの隅丸方形を呈していたものと思われる。壁高は北辺で約20cmを計り、幅40cm、深さ10cm程の側壁溝が廻っている。床面は平坦で、径15cm、深さ約10cm程度の柱穴2個を検出した。柱間隔は1.4mを計り、その状態から東西に3個配されていたものと考えられる。出土遺物としては床面及び覆土中から須恵器、土師器片のほか安山岩剝片

などが出土している。

また、SB33～35はSB32の構築に伴って削平され、側壁溝をとどめるのみで、プラン及び規模は不明である。

SB37（第10図）

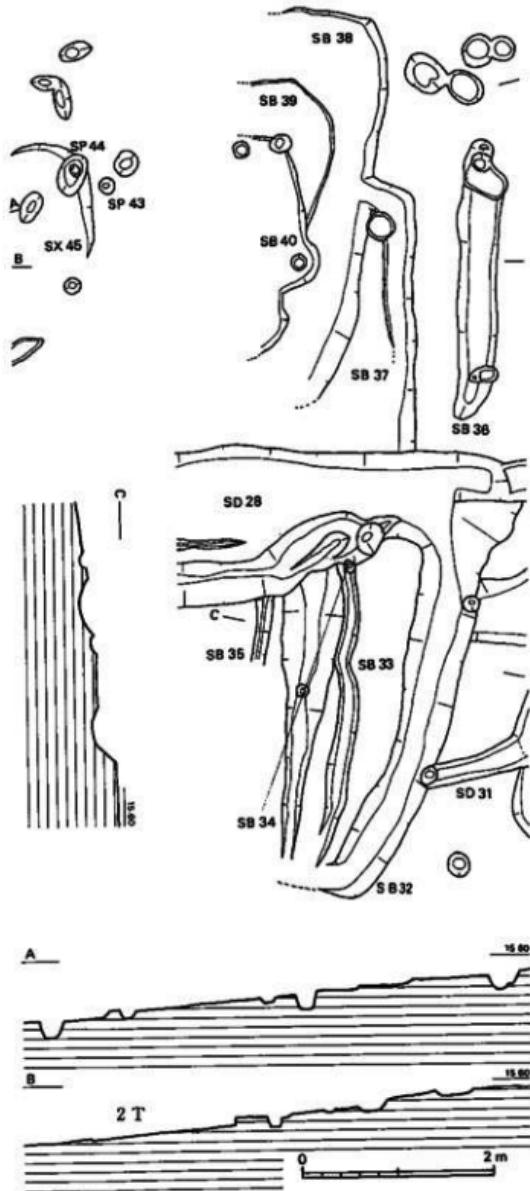
2区南半で、SB32西側に位置する。南側に向けて緩く傾斜する地形にあたるため遺存は悪く、東辺部もSD28によって失われている。壁高は約5cm程で、北西コーナー寄りでは側壁溝が認められた。須恵器及び土師器細片が出土している。

SB38（第10図）

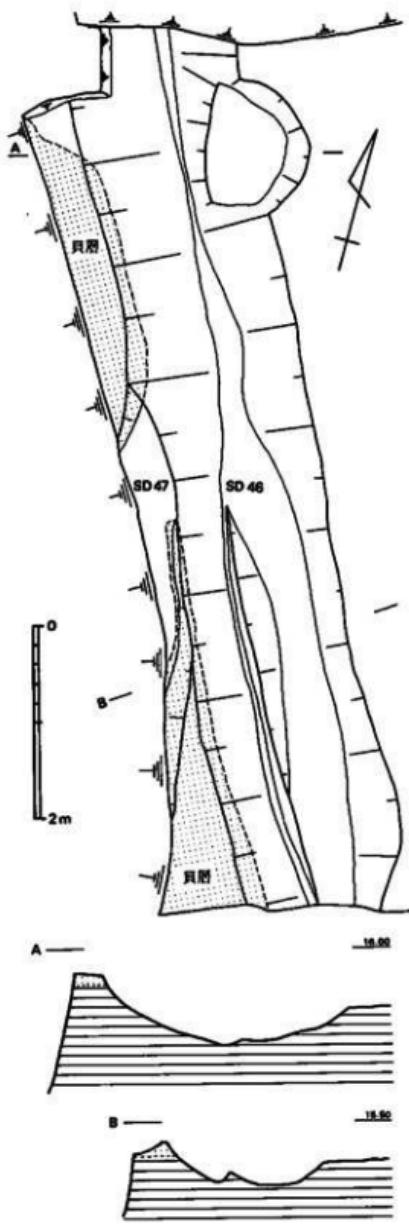
SB37に南接し、その床面によって北辺の東半部を削平されている。現状では北辺及び北西コーナー部分を残し、隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁高は検出面から5cmを計り、床面は平坦で側壁溝及び明確な柱穴は認められなかった。床面から須恵器及び土師器細片が出土している。

SB39・40（第10図）

SB38床面によって削平されているため、共に壁高2～10cmと遺存が悪く、南半は既に流出していた。床面は平坦で、側壁溝は認められなかった。出土遺物としては、



第10図 SB32～SX45実測図 (1:60)



第11図 貝層及びSD 46・47実測図 (1 : 60)

柱穴及び床面から弥生土器片が出土している。

溝状遺構

SD 14 (第8図)

2区西半でS B 13+17の東側に位置する。南北に緩いカーブをもち、現存部で全長4mを計る。北端部で幅20cm、深さ10cmを計り、南側にかけて幅及び深さを増し、最広部で幅75cm、深さ20cmを計る。北西部住跡群との関係は、その接点に現代擾乱塙があるため不明である。覆土下層に砂礫層をもち、溝底面も小さな凹凸をもつなどの流水痕跡を示している。須恵器杯身(第16図41)、底部(45)のほか、須恵器、土師器小片と、台石(第15図23)が出土した。

また本遺構東側に接して、これとほぼ平行に幅20cm、深さ10cm程の溝を検出した。しかし、検出面でのSD 14との切合は不明であった。

SD 24 (第9図)

1区西端にあり、北側をS X 26に、南側をSD 23によって切られている。現存長は5.2mで、幅45cm、深さ15cmを計る。主軸方位はN30°Wをとり、小さく蛇行している。砂質土が充満しており、須恵器・土師器細片が出土している。

SD 28 (第4図)

3区東側から4区東半にかけてほぼ南北に延び、全長15.4mを計る。北半はSK 25~S X 30によって分断され、また上面を削平されており、幅65cm、深さ10cmを計る。S B 32北西コーナーに重複する部分で、底面が約30cmの差をもつ。溝主軸方位もこの

部分からN17°Wと、北半に比べ約10.5°西に偏じ、幅1.5m、深さ約15cmと一定する。覆土は第7層に類似し、下層は砂質土層が充満、溝底面には浅い条状の溝が走るなど、流水の痕跡が窺われた。

出土遺物としては須恵器、擂鉢、土師器等の細片と青・白磁（第17図55）、土錠（54）、铁斧、すり石（第15図22）などが出土している。

SD 46・47（第11図）

SD 46は、4区西端部に位置し、主軸方位をN26°Wにもち直線的に延びている。幅は約2.6m、深さは75cmを計り、西辺は貝層を掘込んで作られている。溝底は幅約10cmと狭く、断面も緩いU字形を呈する。

SD 47はSD 46西側貝層を掘込んで作られた、幅約1m、深さ約20cmの溝で、SD 46掘削に伴って北辺を失っている。共に染付の陶磁器類小片が出土している。

貝層は、SD 46、47に分断され、調査区西北端に遺存していた。現状では長さ4.2m、幅50cm、厚さ15cmを計り、8層上面に形成されている。貝の種類は、大半がハマグリで次いでシオフキ、マガキなどが多く、オキシジミ、アサリ、サルボウなどもみられた。巻き貝はほとんど皆無に近く、スガイなどが混入していたにすぎない。中～近世にかけての土器細片が出土している。

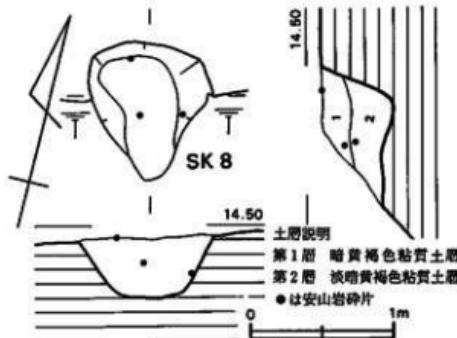
SD 50（第4・8図）

4区東辺にあり、SB 21覆土を掘込んで作られている。現存長4.5m、幅20cm、深さ10cmを計り、主軸方位はN17°Wを指す。覆土はSD 31、SD 10とも類似しており、一連の溝の可能性が高い。

土壤

SK 8（第12図）

2区南側崖面沿いで検出した。上面プランは、北辺及び下端の遺存状況からして、亞な長椭円形と考えられ、北辺部上面で幅85cmを計る。本土壤は検出面から、約45～50cmにわたって60°～70°の角度で第9～11層を掘込んでいる。填底面は現状で長さ8.5m、幅は北辺側55cm、中央部35cmと狭まり、北辺側部分で約10cm程深くなっている。覆土は地山のそれと近似するが、僅かに有機質を含み浅暗く、比較的し



第12図 SK 8実測図 (1:40)

まりも良い。中位～上面にかけて安山岩チップ3点が出土した。

SK 41 (第13図)

3区西南に位置する。削平に伴い上面を擾乱されているため、現状では不整な長方形を呈している。規模は上面で長軸4.45m、短軸は東辺で推定2m、西辺で1.4mを計り、東側にかけて広くなっている。墻底面はほぼ平坦で、上面観同様東側に広がる状況を示し、長軸4.0m、短軸は西辺で0.75m、東辺寄りで推定1.85m、深さは検出面から0.25~0.3mを計る。

覆土中に有機質を多く含み、弥生土器底部片（第16図30）が出土した。

不明遺構

S X26~30 (第4図)

S X26は3区北東端にあり、S X27を削平して平坦な床面を形成している。壁高約20cmの緩い立上りをもつ。床面からは鐵鎌（第17図63）のほか、近世陶器類小片が出土している。

S X27は、S X26により削平され、壁高約10cmを計る。全長3.9m、幅1.3mを計り、主軸方向をほぼ真北にもつ。長楕円形を呈し、床面は平坦で柱穴はない。

S X30は、3区中央部にあり、主軸方位をN110°Wにもち、ほぼ東西に延びている。幅は検出面で1.6~2.2m、深さ20cmを計る。底面には浅い溝状の段が2~3本が平行に延びており、底面の平坦面は、S X26以南の3区全域に広がっていた。近世陶器類小片が出土した。

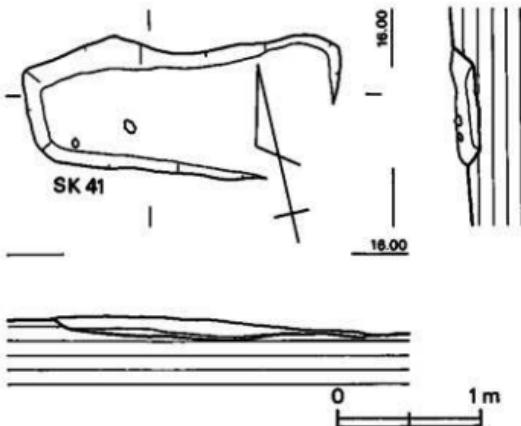
出土遺物、覆土及び溝底面の状態から、3区西側の調査区外で屈曲し、SD46へ続くものと考えられる。また本遺構底面は、東端でS X26に床面に連続し、同一の遺構と考えられる。

S X45 (第10図)

4区北辺中央部に位置する。第9層を約10cm掘込んで作られており、北西コーナー部分を残す。

上面で弥生土器底部を（第16図27）、床面で縄文土器片（第16図25）が出土した。上面出土の弥生土器はSB39・40床面に相当するレベルで分布しており、S X45に伴うものとは考えられない。

また、このS X45に重複するSP44・43から石鎌が1点ずつ出土しており（第14図2、3）SB39・40に伴う柱穴の可能性がある。



第13図 SK 41実測図 (1:40)

IV 出土遺物

出土遺物としては、縄文・弥生時代をはじめ古墳時代、奈良・平安時代、室町時代、及び近世～現代にかけての各期にわたる遺物が出土した。しかし各時期の生活面が複雑に重複し、また、これらが緩斜面に立地している事から遊離したものが多く、多くの遺物は原位置を失っていた。以下時代別にその概要を記す。

縄文・弥生時代

縄文土器 (第16図24・25)

1区以外の各区から出土した。特に4区ではS X45床面(25)、もしくは第9層上面で層位的に出土した。外面に不明瞭な条痕を施すものが多く、沈線をもつもの(24)もみられる。その特徴から、概ね縄文時代後期に比定されよう。

弥生土器 (第16図26～33)

調査区のほぼ全域から出土した。特に当該期の遺構のある3区南半から4区北半にかけて多く出土している。全形の分るものはないが、底部に幾つかの形態があり、底面穿孔例(29)及び側面から小円孔が貫通している例(27)などもみられる。口縁部は逆L字状に、直角に近く外反する変形土器(32)、短頸壺形土器と考えられるもの(33)などがある。弥生時代中期前半の所産と考えられる。

石器 (第14・15図)

調査区全体から出土し、遊離したものが多い。3・4区での出土層準は、第8層下半～第9層上面で面的な広がりをもって出土した。

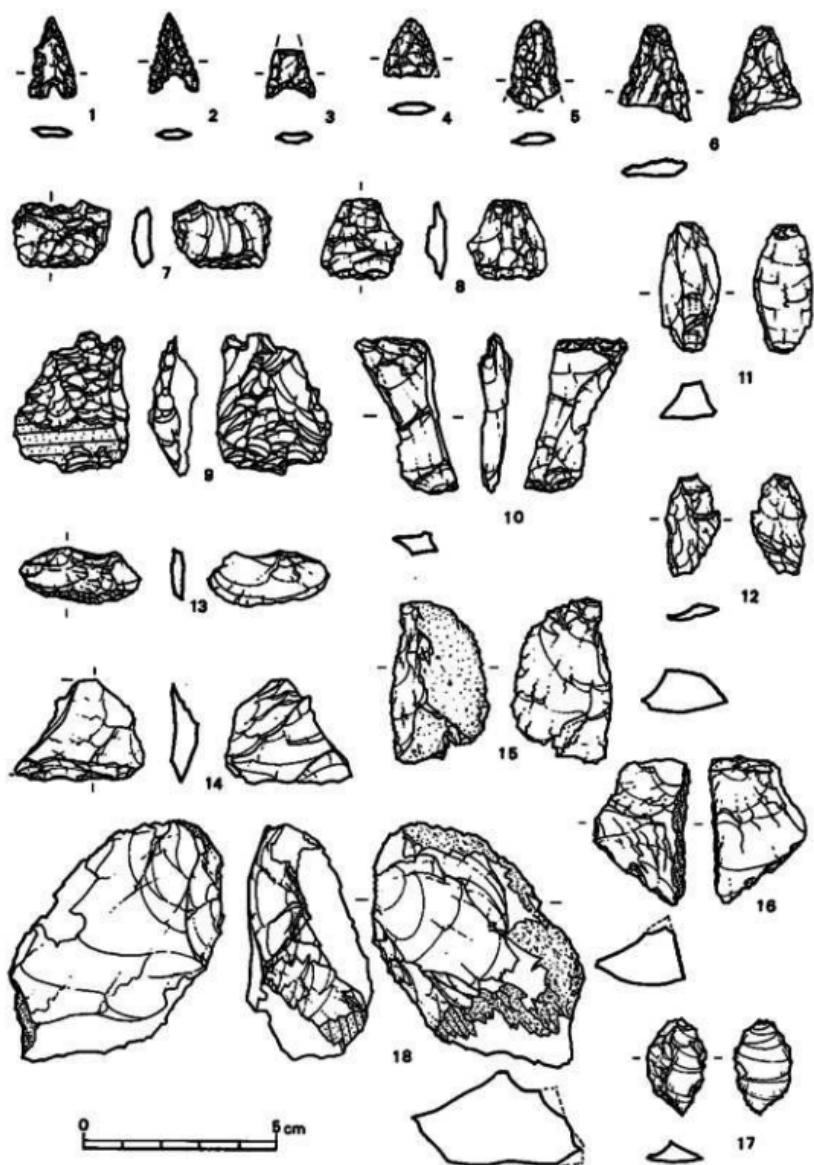
その組成は石鏽、スクレーバー、楔形石器、同削片、微細な剥片剥離痕のある剥片、碎片、石核などの他に磨製石斧、ハンマー、台石、すり石などが出土している。

石材は打製石器は安山岩が大半を占め、一部に水晶、黒曜石、チャートもみられる。その剥片剥離の実態は不明であるが、石核では剥片素材がみられ、打面は、自然面打面、平坦打面、稜上加壓などがみられる。石斧は全形を窺えるものは1点 (第15図19)のみである。本例は表裏刃面と一侧刃刃部寄り及び基端部に敲打痕をもち、刃部は再加工されており、丸味を帯びた偏刃に近いもので、表裏とも一定方向の斜めの擦痕をもつ。

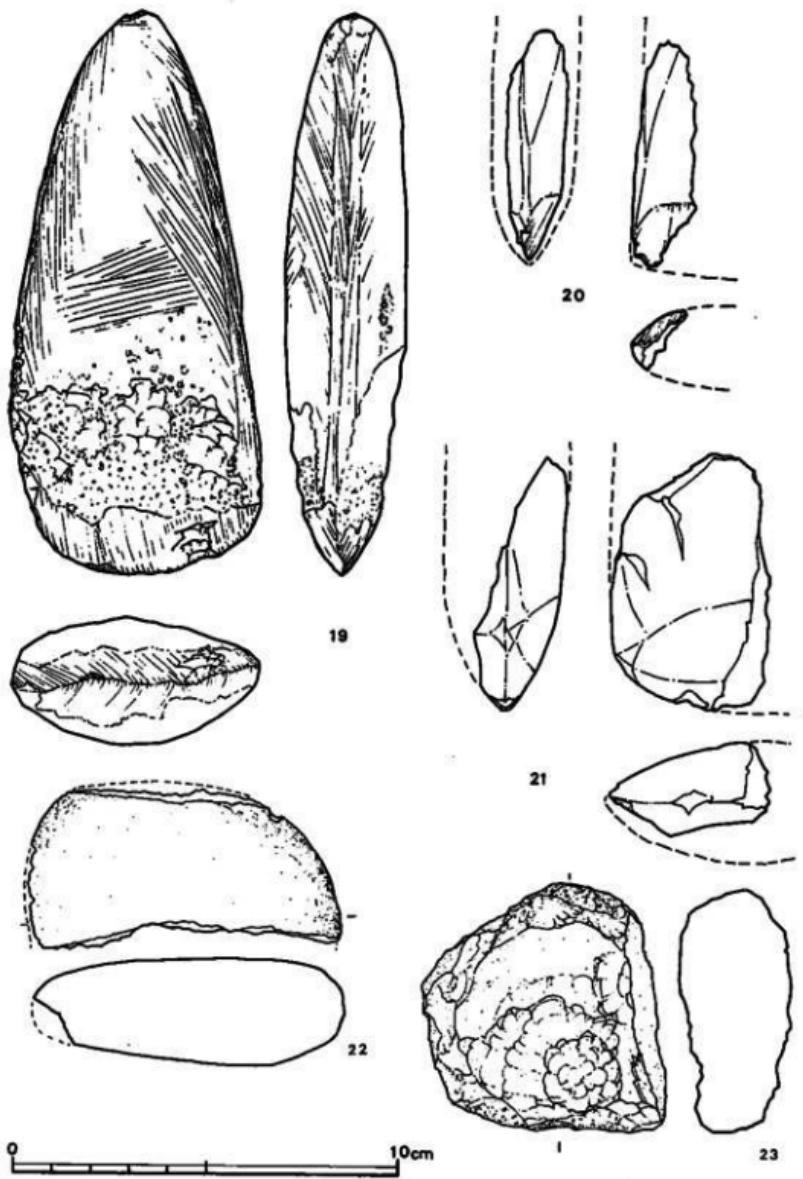
台石(くぼみ石状)、すり石は共に側面に敲打痕をもつ。共に住居跡、溝状遺構などの遺構から出土しており、所屬時期は不明である。また打製石器類も、縄文・弥生時代のいずれに属するかは断定しかねる。

古墳時代

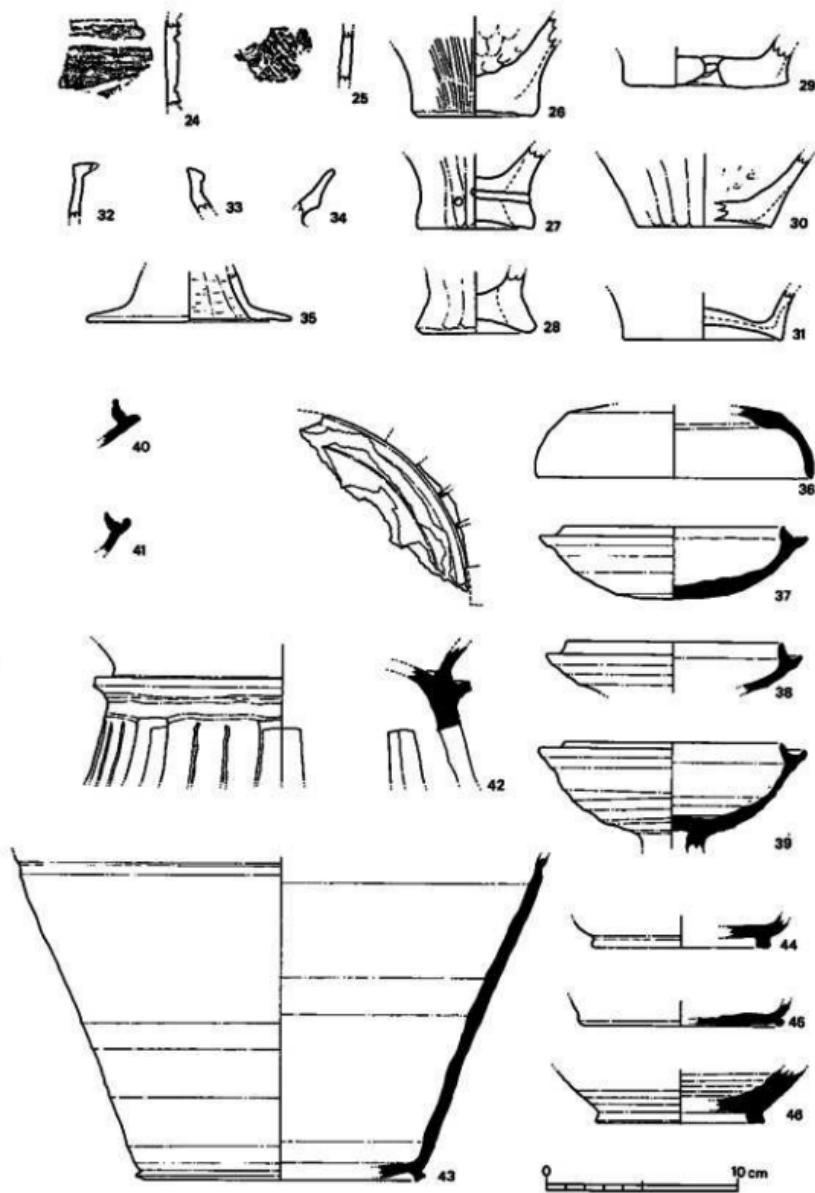
土師器 (第16図34・35)



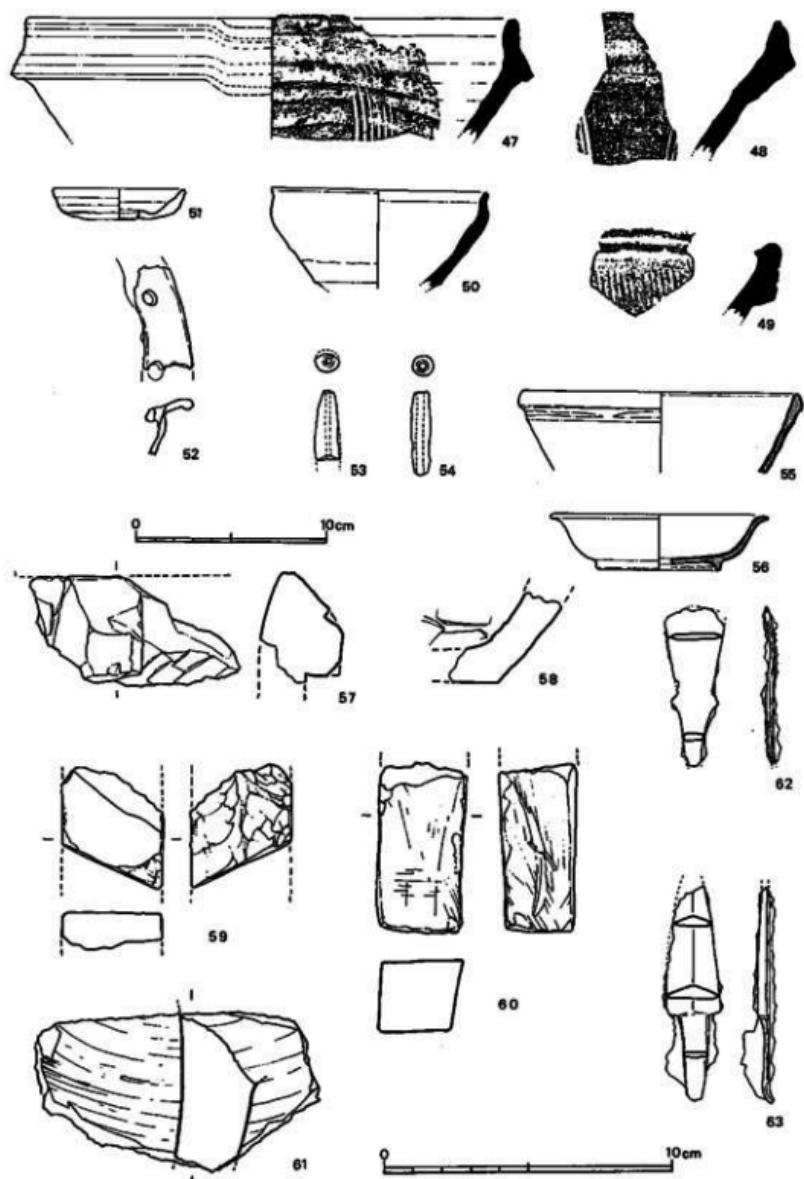
第14圖 出土遺物實測圖 (1) (2 : 3)



第15図 出土遺物実測図 (2) (2 : 3) 22・23は1 : 2



第16図 出土遺物実測図(3) (1:3)



第17圖 出土遺物實測圖 (47~56・1 : 3, 57~63・1 : 2)

二重口縁の壺もしくは整形土器（34）と、高杯（35）がある。概ね布留II～III式に比定されよう。

須恵器

杯蓋、杯身、有蓋高杯、壺、甕などが出土している。杯蓋（36）、杯身（37・38・40・41）、有蓋高杯（39）など、概ね古墳時代後期（6世紀後半）に比定される。また土師器は細片のため、詳細は不明である。

奈良・平安時代

須恵器杯身（第16図44・45）、壺（43）、瓶（46）及び円面鏡（42）がある。底部の形態などから44～43は奈良時代前期に、46は中頃に、それぞれ比定される。円面鏡も、ほぼこの時期幅で把えられよう。本例は口縁及び脚下半を欠き、径の約1/5をとどめる。陸は海から緩いカーブを示し、無堤式と考えられる。海は、下部の小さな段から強く外反し、陸より高い外縁に至る。硯部外端には突帯を1条廻らしており、脚部には長方形透しを8孔設け、その間に篦描き沈線2本を、更に透し上端部に幅広の沈線1条を施している。

壺（43）は3・4区にかけての第8層から、広い散布範囲をもって出土した。低く、外反気味の高台をもち、直線的に立上る体部上半に、浅い沈線を廻らしている。

また平安時代以降と考えられるものとしては、瓦質椀があげられる。破片数は割合多いものの全て小片で、全形を窺えるものを欠く。内面に暗文風寛磨きを施している。

室町時代以降

陶器では備前焼擂鉢（第17図47～49）、天目茶碗（50）、壺などが、土師質土器では土鍋（52）及び同脚部、杯、小皿（51）などがある。磁器類では白磁碗（55）、皿（56）をはじめ、青磁・白磁の碗小片が出土している。近世陶磁器類は、碗、皿類を中心に、瓶、壺類がみられる。個体数は多いが、小片のため詳細は不明である。

これらを時期的にみれば、47・48が室町時代でも前半期に、56が後半期に比定される。磁器類も、概ねその時代幅で把えられよう。また、49・52をはじめ、近世陶磁器類については正確な所属時期は不明である。

その他の遺物（第17図）

滑石製石鍋の口縁部（57）、同底部（58）、角柱状の砥石（59・60）不明石製品（61）、鐵鎌（62・63）、土鍤（53・54）などがあげられる。

57は口縁外面に四角に突起をもち、突帯状に廻るものではない。また61は外面に同心円状の研磨痕と考えられる擦痕をもち、外面には高台状の高まりが観察される。

これらは、59（S B32）、62が、ほぼ古墳時代後半頃に、53（S D28）、57、58、60が中世に、それぞれ考えられる。63（S X26）は伴出遺物から近世と考えられる。

第1表 出土遺物觀察表
(単位cm, g) 條()内は現状での最大値を示す

No	器種	石 材	最大長	最大厚	最大厚	重 量	備 考	出土区・層、原番
1	石 鋸	安山岩	2.1	1.2	0.25	0.55	基部に抉り。表面に素材面。	S B22覆土 №68
2	石 鋸	安山岩	2.0	1.3	0.3	0.5	凹基。周辺加工は入念。	S P44覆土 №260
3	石 鋸	安山岩	(1.35)	1.3	0.35	0.45	凹基。表面に素材面。上半欠。	S P43覆土 №261
4	石 鋸	安山岩	1.5	(1.4)	0.3	0.6	平基。三角形。基部一端欠。	S D10覆土
5	石 鋸	安山岩	(2.2)	(1.35)	0.3	0.9	先端は丸味もち。基部両端欠。	2区下層 ① №40
6	石 鋸	安山岩	(2.5)	(1.9)	0.5	21.0	先端、下半欠。石槍か?	1区上層
7	楔形石器	安山岩	2.55	1.75	0.5	2.4	両側辺にも対向する剝離痕。	4区下層 №210
8	楔形石器	安山岩	2.1	2.1	0.5	2.1	両側辺に截断面。両面に錯交状剝離痕。	4区下層 №262
9	楔形石器	水 晶	3.6	2.9	1.3	9.7	背面に筋理面。截断面1面。	4区下層 №230
10	楔・削片	安山岩	4.0	2.7	0.8	5.2	背部にネガティブな截断面。	4区下層 №218
11	楔・削片	安山岩	3.3	1.1	1.0	4.95	打点破碎。両極にバルブ。	S B17覆土
12	楔・削片	安山岩	2.5	0.9	0.4	1.15	打点破碎。背面に截断面。	2T下層
13	削 器	安山岩	3.45	1.4	0.6	2.1	下辺に微細な加工痕	2T下層
14	削 器	安山岩	3.35	2.65	0.7	5.5	下辺一方に加工痕。半欠。	
15	剝 片	安山岩	4.15	2.7	1.2	11.75	平坦打面。加筆点より半欠。	2区ピット覆土
16	剝 片	安山岩	3.7	(2.5)	(1.5)	11.05	横上加筆。背面に反対方向の剝離痕。	S B23覆土 №92
17	剝 片	チャートか	2.5	1.55	0.6	1.55	打点破碎。背面同一方向剝離痕。	2区下層 №86
18	石 槌	安山岩	7.6	4.2	3.2	115.95	自然面打面の剝片素材。一側辺で交互に剝離作業面認定。	2T下層
19	磨製石斧	流紋岩系 石材か	14.55	6.6	3.2	437.25	入念に研磨。基礎部一側辺一部と刃縁表面に広く敲打痕集中。	4区下層 №161
20	磨製石斧	不 明	5.9	1.7	1.5	10.0	刃部片。刃縁部は直線的か。	4区第2群中
21	磨製石斧	流紋岩か	6.5	4.1	2.4		刃部片。風化著しい。	4区下層 №166
22	すり石か	流紋岩か	10.7	(5.5)	3.9	335.1	自然円錐使用。側辺に敲打痕。	4区下層 №250
23	台 石 か	花崗岩	9.6	9.1	4.0	397.95	一面に凹み、側辺に敲打痕。	S D14覆土 №93

① 2区下層……2区包含層下層。同じく上層は2区包含層上層。

② 楔・削片……楔形石器の剝片。

土器類

縄文・弥生土器類

No	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
24	縄文土器	器厚 0.7	外面に幅0.3~0.5cm程の沈線4本を施す。	外面横位の深い条痕をヨコナダ後沈線を施す。	胎土：長石、石英粒多く含む。焼成：普通。色調：淡茶褐色。小片。4区下層 原番：No242
25	縄文土器	器厚 0.5		内面ナデ。外面は浅く一定方向の条痕。	胎土：長石、石英粒多く含む。焼成：普通。色調：淡茶褐色。S X 45底面。 原番：No241
26	弥生土器底部	底径 6.4	底部は体部下半からやや突出気味となる。平坦で僅かに凹み気味となる。器壁は厚い。	内面に指頭圧痕。体部外面は縱方向の刷毛目。底面はナデ。	胎土：石英、長石、雲母細粒多く含む。焼成：良好。色調：赤褐色。4区下層 原番：No164
27	弥生土器底部	底径 6.2	底部は体部から外湾気味に突出。底面はやや凹む。底・体部屈曲部に径0.4cmの円孔2個が施され、うち一つは貫通する。	体部内面・底面はナデ。外面はやや深い縱方向の荒磨き。	胎土：石英、長石、雲母細粒及び粗粒を含む。焼成：良好。色調：くすんだ赤褐色。S X 45上部 原番：No151
28	弥生土器底部	底径 6.3	上げ底を成す底部は、体部から斜め外方に外反、端部を丸く終える。器壁は厚い。	底部中央に粒土を充填。内面及び底面はナデ。外面は縱方向に深い荒磨きもしくはナデつけ。	胎土：石英、長石、雲母の粗粒多く含む。焼成：良好。色調：赤褐色。底部。4区下層 原番：No165
29	弥生土器底部	底径 8~8.5	底部は平坦で中央に焼成前の径1~2.1cmの円孔をもつ。器壁は厚い。	内外面ともナデ。円孔は箇状工具で外面から。	胎土：1~5mm程の石英、長石粒多量に含む。焼成：良好。色調：淡赤褐色。4区下層 原番：No211
30	弥生土器底部	底径 7.0	外反気味の体部から、僅かに上げ底の底部をもつ。	内面は削り風のナデ。外面は縱方向のやや深い荒磨き。	胎土：石英、長石、雲母細粒多く含む。焼成：ややあまい。色調：淡暗褐色。SK 41覆土。 原番No146
31	弥生土器底部	底径 8.2	外面気味の体部から、上げ底の底部をもつ。	内面及び底部外面はナデ。	胎土：石英、長石、雲母細粒多く含む。焼成：良好。色調：暗赤茶褐色。2T西半下層 (S B 40付近)
32	弥生土器口縁部	器厚 0.5	逆L字状に外方に拡張する口縁部は、上面に平坦面をもつ。	風化のため不詳。	胎土：石英、長石、雲母細粒多く含む。焼成：ややあまい。色調：明褐色。4区下層
33	弥生土器口縁部	器厚 0.6	肩部からほぼ直立する短い脚部をもち、口縁部を内傾気味に僅かに肥厚。	脚部外面に細い沈線？2条を施す。内面はナデか。	胎土：石英、長石細粒含む。焼成：あまい。色調：淡桃灰白色。SD 28覆土 原番No257

土師器・土師質土器

() 内は推定復原値を示す。

No	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
34	土師器口縁部	器厚 0.8	外反する二重口縁をもち、端部を丸く終える。	風化のため不詳。	胎土：細砂粒含む。焼成：ややあまい。色調：淡乳灰白色。4区下層 原番：No225
35	土師器高杯脚部	脚端径 10.8	太い脚柱部から、ほぼ水平に強く外反する脚柱部をもち、端部は丸	外面は脚柱部を縱方向の荒磨き、内面は脚部横ナデ、脚柱部を横方	胎土：微細粒含むが緻密で良好。焼成：ややあまい。色調：赤褐色。

			く終える。	向の箇割り。	4区下層	原番：No228
51	土師質 土器皿	口径 (6.8) 器高 (1.6) 底径 (4.8)	底部は平坦であり、外方上に伸びる短い口縁部をもつ。	底部はヘラ切り、その他は回転横ナデ。	胎土：石英粒を含む。焼成：やや軟弱。色調：淡褐色。 4区中層 原番：No265	
52	土師質 土器鍋	器厚 0.3	体部は内湾しながら伸び口縁部との境界でくの字状に折れる。口縁端は丸く終り、内面に平坦部をもつ。内耳の鍋である。	横ナデ。内耳部分は粘土板を貼付け凸帯状をなし、円孔を穿っている。	胎土：微砂含む。焼成：堅緻。色調：赤褐色。 S X30覆土。	

須恵器類

No	器種	法量	形態的特徴	技法的特徴	備考
36	杯 盖	口径 (14.2)	天井部と口縁部の境界が不明瞭で口縁部はやや垂直気味に垂下し、端部は丸い。	天井部外面回転ヘラ削りか、他は内外面とも回転ナデ。	胎土：砂粒を多く含む。焼成：堅緻。色調：淡茶褐色。自然釉付着。 S D26覆土 原番：No69
37	杯 身	口径 11.4 器高 3.75	体部は丸く内湾し外方に伸びる。受部は内面に凹部を形成し、内傾するたちあがりに至る。		胎土：石英砂粒を含む。焼成：軟弱。色調：外面は黒灰色。内面は淡灰色。 S B1床面 原番：No10・14
38		口径 (推11.4)	体部は丸く内湾し、外方に伸びる。受部は内面に凹部を形成したちあがりはやや内傾し端部はやや尖り気味である。	体部外面下半回転ヘラ削り、上半部回転ナデ。内面は回転ナデ。	胎土：石英粒子含む。焼成：堅緻。色調：淡灰色。 S B1覆土。
39		口径 (11.4) 杯部高 (4.7)	体部は内湾気味に斜め上方に伸びる。蓋受部はさらに外方に張り出し内面に凹部を形成し内傾するたちあがりに至る。脚部は円筒形を呈す。	マキアゲ、ミズヒキ。体部外下半回転ナデ。仕上げナデが認められる。クロロ回転右方向。	胎土：石英、長石粒含む。焼成：やや軟弱。色調：淡灰色。 S B1床面。 原番：No11・16・17・20
40	杯 身	小片	たちあがりは斜に内傾。端部丸い。		S B18側壁溝中。
41	杯 身	小片	たちあがりは斜に内傾。	たちあがりはオリコミ手法。	S D14覆土。
42	円面鏡	環部外端径 (17.8) 突帯部径 (19.8) 器壁 0.5~1.6	縁は海から低く、緩いカーブをもち移行し、内堤は付かない。海は小さな段から、強く外反する外縁に続き、外縁は海に比べ高い。環部外端には、断面四角形の突帯を削らす。脚部は斜外方に延び、長方形透し8孔を、またその間に竪書き沈線を施し、透し上端部には幅広の沈線を施す。	マキアゲ、ミズヒキ。内面は回転ナデ。体部外面及び鏡面は回転ナデ。突帯は下半にハリツケ痕跡をのこし、端部を回転ナデ。透しは外縁から竪状工具により施され、継位の線も同一工具と思われる。クロロの回転右方向。	胎土：1mm前後の砂粒を含むが、概して緻密。焼成：良好、堅緻。色調：淡灰色。 径約1/5残。 S B17床面。 原番：No58

43	壺	底径 (15.0)	体部は斜め上方に向かって直線的に伸びる。底部との境界はへラ状工具により沈線状をなし、高台を付加する。バケツ状を呈する。	マキアグ、ミズヒキ。 体部外面回転ヘラ削り。内部回転ナデ。器厚は均一である。ロクロ回転左方向か?	胎土: 石英粒子、白色粒子を含む。焼成: 堅緻。色調: 灰色一部自然釉がかかる。 3・4区下層
44	底 部	底径 (10.4)	若干外方へ張り出し氣味の扁平な高台をもつ。	高台部は貼り付け。	胎土: 精良、微砂を含む。焼成: 軟弱。色調: 乳白色。 4区下層 原番: №183
45	底 部	底径 (10.8)	扁平な高台をもつ。高台端部は丸く鈍い。	体部外面は回転ヘラ削り。高台は削り出しが?	胎土: 精良、微砂を含む。焼成: 堅緻。色調: 淡灰色。 SD14覆土 原番: №52・59
46	底 部	底径 (8.8)	外方に張り出す高台をもつ。体部は内湾氣味に外方に伸びる瓶頸の底部か?	マキアグ、ミズヒキ。 体部外面回転ヘラ削り。内部回転ナデの凹をよく留める。高台部は貼り付け。	胎土: 精良。焼成: 堅緻。色調: 淡灰色。 SD28 原番: №188

陶器類

No	器種	法量	形態的特徴	技法的特徴	備考
47	擂鉢	口径 (25)	体部は斜め上方に内湾氣味に伸び、口縁部は直立氣味で、強いナデにより外面に凹部をつくり上下に拡張させる。	体部内外面上半部回転ナデ、内面に櫛齒状工具による糸線が下から上へ付加される。(7条1単位)	胎土: 砂粒を多く含む。焼成: 堅緻。色調: 紫褐色。 4区中層
48	擂鉢		体部は直線氣味に斜め上方に伸びる。口縁部は直立氣味に伸び下端部を若干拡張氣味にする。断面は三角形状を呈する。	体部外面回転ナデ。内面はよく研磨され平滑である。一部に糸線が認められる。	胎土: 白色粒子を含む。焼成: 堅緻。色調: 灰色。断面褐色を呈す。 4区中層
49	擂鉢		口縁部は直立氣味で体部からの延長を上下に拡張させ境界をつくる。口縁部内面は凸唇氣味に肥厚させる。外面は二条の沈線を施す。	口縁部内外とも最終回転ナデを施す。内面に細い糸線を施す(8条1単位)。	胎土: 白色粒子を含む。焼成: 堅緻。色調: 紫褐色。 3区上層
50	天目茶碗	口径 (11.0)	体部は斜め上方に内湾氣味に伸び口縁部は内方に屈曲する。口縁端部はさらに外方に伸び丸く終わるS字状を呈する。	体部外面上半分に褐釉を施し、下半分は無釉。内面は見込み部分まで施釉される。高台が付加するものと思われる。	胎土: 精良。焼成: 堅緻。色調: 茶褐色。 2区SP覆土 原番: №27

磁器類

No	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考	
55	白磁碗	口径 (14)	体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部外面は強いナデにより段落をもち、底部をつくる。端部は外方に肥厚させ、口唇部は丸く終わる。	灰白色の施釉。質入が著しく認められる。	素地は白く磁器質で微砂を含む。焼成：堅緻。色調：乳白色。 S D 28 製土 原番：No26	
56	白磁皿	口径 器高 底径	11.4 2.4 6.4	体部は斜め上方に伸び 口縁部は外方に折れる。 口唇部は平坦面をもち、端部はやや丸い。	体部全体に白釉を施す。質入はない。	素地は白く磁器質、焼成：堅緻。色調：乳灰白色。 S B 4 柱穴出土 原番：No26

土製品

No	器種	最大長	最大幅	最小径	孔 径	重 量	備 考	出土区・層・原番
52	土 瓶	現3.6	1.2	0.5	0.3		半欠	S D 28 製土 No189
53	土 瓶	4.4	1.0	0.7	0.4			4区包含層下層

石製品

No	器種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出土区・層・原番
57	石 銚	滑 石	—	—	2.7		口縁部小片、外面に突起を付す。	2区包含層中層
58	石 銚	滑 石	—	—	1.3	34.2	底部小片。	4区中層 No175
59	砥 石	變灰岩 系 か	—	3.5	—	19.8	風化著しく、角柱状か。	S B 32 製土 No117
60	砥 石	不 明	(5.85)	3.0	2.5	87.6	四角柱状。	4区下層 No249
61	不明石製品	不 明	—	—	2.6	195.95	底部片、高台付近か。	4区包含層中層

鉄 器

No	器種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出土区・層・原番
62	鉄 鐸	(5.5)	(2.1)	0.3	7.15	有茎、平根矛箭式	4区下層 No207
63	鉄 鐘	(7.4)	1.9	0.45	15.40	有茎柳葉形で身部は正面三角形の鋲造り。	S X 26 床面 No103

V まとめ

古江西第1号貝塚は、調査の結果縄文時代以降、古代・中世・近世及び現代まで、各期にわたる複合遺跡である事が判明した。ここでは時代別に、調査によって得られた2、3の問題点に触れまとめとしたい。

縄文・弥生時代は共に遺物も少なく、遺構もほとんどが失われていた。縄文土器は、条痕文を主体として、体部外面に沈線文を施し⁽¹⁾、その特徴から後期中津式⁽²⁾に比定されよう。また弥生土器は概ね中期前半に位置づけられるが、詳細は不明である。次いでこれらに伴う石器として磨製石斧・石鎌・楔形石器・スクレイバー・ハンマーストーン、及び楔形石器の削片・剝片・石核などがあげられる。このうち石斧では刃部を再生している縦斧⁽³⁾が縄文時代に伴うものと考えられる。また楔形石器はIIa類が中心となり、I類⁽⁴⁾は認められない。しかし、石鎌と共に年代の指標とは成り得ないため、打製石器類については正確な所属時期は不明である。また台石（くぼみ石状）とすり石についても、時期の異なる遺構出土のため、石器組成に含まれるものであるのか否かは不明である。遺構としては縄文時代と考えられるものはSX45とSK8のみで、弥生時代のものとしては、SB39・40及びSK41などがあげられる。

古墳時代には、前半期の遺構はなく、わずかに土器細片が出土したのみである。後半期から奈良時代にかけては、住居跡を中心に遺構数が増している。ここで時期別にその構築順序をみると、古墳時代後半（6世紀後半）のものとしてはSB1があげられ、SB2・3→SB1となる。次いでSB17⁽⁵⁾はSB22を切り、またSB13により切られている事から、SB22→SB17→SB13（SB11→SB12→SB13）と移行している。また同一の溝と考えられるSD31・50・10と住居跡との関係は、SD31→SB32、SB21→SD50を示し、SB32がSB21に後続する事を示しており、SB33～35はSB32に先行する。この他のSB9・15・16、36～38についても切合の関係をもたない。時期的にはSB17床面から円面窓が出土している他は、いずれも須恵器及び土師器細片である。高台を有した杯身等にもみられ、その切合の関係から、概ね奈良時代に属するものと考えられる⁽⁶⁾。

ここで円面窓についてみれば、突堤径19.8cmを計る比較的大型の無堤式透脚窓（腰足窓）に分類される⁽⁷⁾。円面窓としては県内では9例目で（第2表参照）、広島湾岸では府中町下岡田遺跡に次いで3例目にあたる。その性格から、律令体制下の支配機関である国衙・郡衙などの官衙、もしくは駅館、寺院跡、窯跡などに出土が限られる傾向が強く、当遺跡の様な集落跡からの出土例は比較的希といえよう⁽⁸⁾。また古代山陽道のルートからも大きく隔っており、その立地から海上交通に何らかの関係をもつたものであろうか。律令体制下での識字層の問題と共に、今後の課題といえる。

中・近世の遺構はいずれも散発的である。中世のものとしてはSB4の建物跡とSD28の溝

及びSB7があげられる。礫群もこの頃旧地形の最も疊んだ部分に形成されたものである。SB7は竪穴状を呈したものか、または建物跡周辺に溝を廻らせたものか不明である。

次いで近世には、SD46・47及びSK25～SX30が形成されている。これらは明確な所属時期は不明であるが、SX30底面は調査区南側にかけて広がる近世の平坦面に統合しており、SD46と連なる可能性が高く、建物を区画していた遺構と考えられる。

貝層は包含層下層（第8層）直上に堆積し、SD46・47などの近世遺構によって切られていた。層中からの出土遺物によって近世に下るものと考えられる。またその貝の種類はハマグリ、シオフキなどの二枚貝を中心にマガキなどを含んでいる。いずれも鹹水産で砂地もしくは岩場に生息するもので、少なくとも近世まで付近は古広島湾岸の海浜部にあたり、太田川の影響を全く受けいなかつた事が窺われる⁽¹⁾。周辺部に広く散布する貝層も、これと相前後した時期に形成されたものと考えられ、近世の遺構面の広がりを示している。

中世では厳島領などの莊園の展開と、佐伯氏、武田氏、大内氏などの湾岸諸勢力の存在、また、近世にかけての毛利氏の據頭など、政治的にも複雑な観を呈している。当遺跡と同じく中世以降に形成された貝塚としては、佐伯郡大野町高畠貝塚⁽¹⁰⁾などをはじめ、安芸郡海田町石原常本貝塚⁽¹¹⁾、福山市平松第1号遺跡⁽¹²⁾など、瀬戸内海沿岸部に数多く残されている。これらはいずれも単に集落内での消費にとどまらず、干物等に商品化され外部に供給されたものと考えられる。本遺跡の貝塚もこれらと同様に、五日市、廿日市などの市・内海交通及び港湾の発達などを背景として、形成されたものと考えられ、「古江」地区が、海浜部の集落として発達していった事を示すものと考えられる。

今回の調査は、周辺に分布する貝塚の一画にすぎず、各時期にわたる生活面も、周辺に広がる可能性が残されており、その把握は今後の課題といえる。特に奈良時代の集落構造と円面鏡との関係など、残された問題は多く、稿を改めて再検討したい。

（註）

- (1) 細片ではあるが、口縁部には刻み目を施している口縁部小片がみられる。
- (2) 倉敷考古館「里木貝塚」「倉敷考古館集報 第7号」1971年。
- (3) 佐原真「石斧論一横糸から縱糸へー」「考古論集—慶祝松崎寿と先生六十三歳記念論文集」1977年。
- (4) 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター「額原遺跡」「中國縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(4)1983年の分類による。I類は縦、II類は斜片素材で、IIa類は周辺加工を施したものである。
- (5) SB17とSB21は、検出面で明確な切合は示さず、柱穴も不明瞭であった。これは自然岩塊が存在するSB13も同様であった。一応ここでは住居跡の重複と解釈したが、南北方向に長く壁をもつ平坦面を造成した遺構とも解されよう。
- (6) 奈良期に属すると考えられる住居跡は、重複等を合わせれば、その側壁溝の数から、最低14軒分が考えられ、同時期の軒数は、この数値を更に下まわったものと考えられる。遺物は細片が多く、また削平・流出し

- た遺跡も多く考えられる事から、これが奈良期における本遺跡の集落の全様を示すものとは考えられない。
- (7) 円面鏡の分類にあたっては、最も新しい全国的な集成として、主に橋崎彰一「日本古代の陶鏡」とくに分類について』『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』1982年によった。しかし研究者間で呼称等に相異があり（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976年など）、その呼称と併記した。
- (8) 前掲者。内藤政恒「調度・硯」『新版考古学講座』7、1970年、石井則孝「陶鏡について」『史館』第2号1974年ほか。
- (9) 広島大学教授植葉明彦氏の御教示による。
- (10) 広島県教育委員会「高畠貝塚」「山陽新幹線建設用地内遺跡発掘調査報告」1973年。
- (11) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「石原常本貝塚」「年報、ひろしまの遺跡」1982年。
- (12) 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センターが1980年に調査。

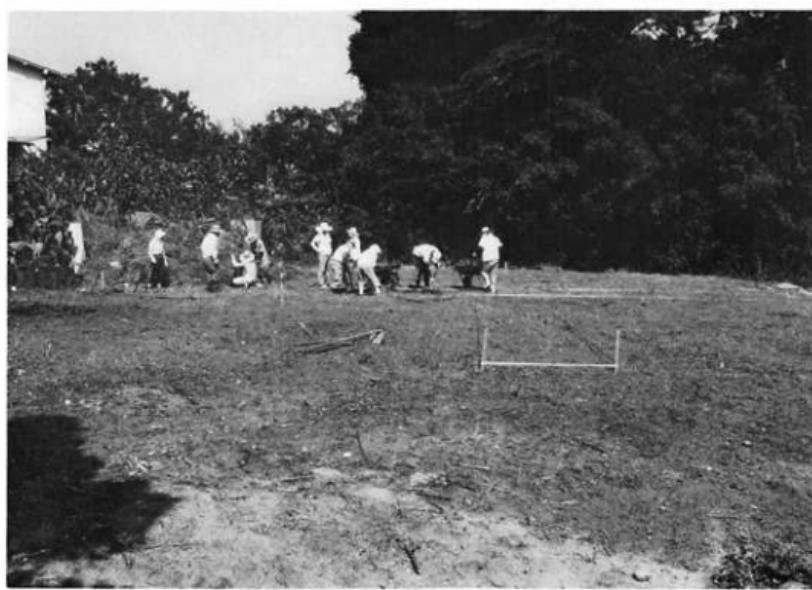
第2表 県内円面鏡出土土地地名表

遺跡名	所在地	遺跡の性格	円面鏡の種類及び出土点数	参考文献
大宮遺跡	深安郡神辺町	弥生時代集落 包含層出土	無堤式透脚硯 (腰足硯)1点	広島県教育委員会「大宮遺跡第5次発掘調査概報」 1982年
御領遺跡	深安郡神辺町	現國府寺叢出 土地は不詳	蹄脚硯※ 1点	広島県教育委員会「神辺御領遺跡第1次発掘調査概報」1976年
ザブ遺跡	福山市津ノ郷町	包含層出土	円面(腰足)硯 1点	1945年試掘出土
許山古窯跡	三原市高板町	窯跡	円面(腰足)硯 2点	向田裕始「三原市高板町許山窯跡探集の須恵器」 『芸能』第12集 1981年
上山手廻寺	三次市向江田町	寺跡	円面(腰足)硯 1点	広島県教育委員会「上山手廻寺第3次発掘調査概報」1981年
下岡田遺跡	安芸郡府中町 城ヶ丘	推定駅館または国衙跡	円面(腰足)硯 2点	府中町史編纂委員会編『安芸府中町史』資料編・ 府中町 1977年
古江西1号貝塚	広島市西区古江西町	集落跡	無堤式透脚硯 (腰足硯)1点	

* 御領遺跡からは2~3個体の円面鏡が出土したといわれている(草戸千軒遺跡調査研究所「草戸千軒」No.19、1975年)。しかし詳細については不明であるので、ここでは報告されている蹄脚硯を1例として扱った。



a 遠 景 (南西から)



b 調査前近景 (西から)



a 遺構検出状況（南から）



b 遺構検出状況（東南から）



a 4区貝層及び
SD46・47検
出状況
(南から)

b 4区貝層及びSD46断面
(南から)

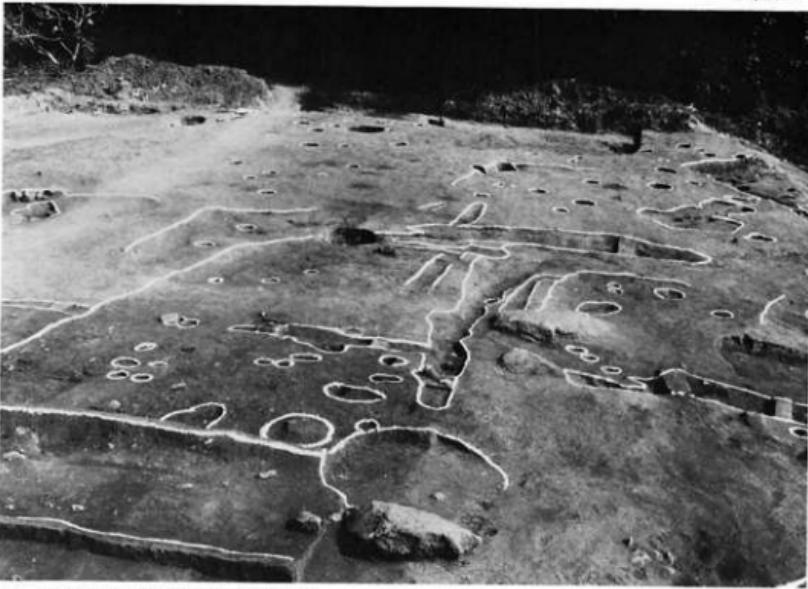




a 2区SB1検出状況（北から）



b 2区SB1完掘状況（南から）



a 2区住居跡群検出状況（西から）



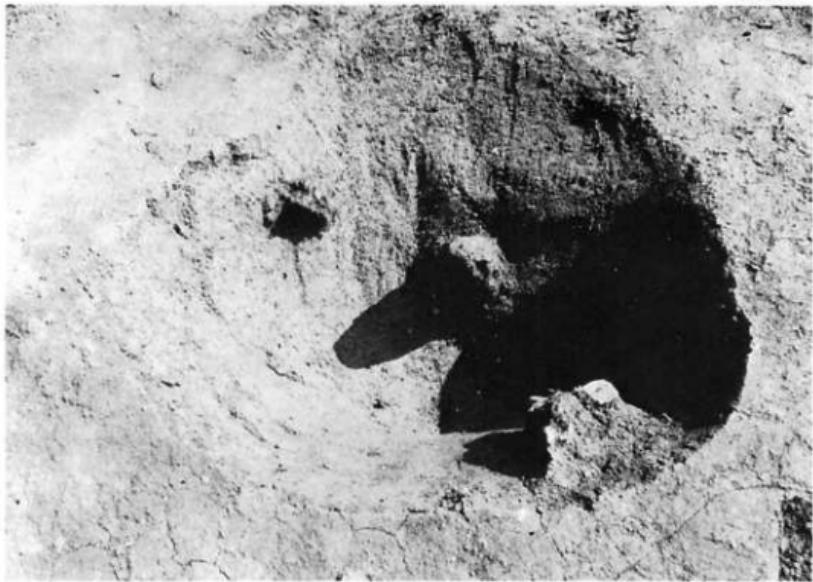
b 2・4区住居跡群検出状況（北から）



a 3区遺構検出状況（東から）



b 3・4区遺構検出状況（南から）

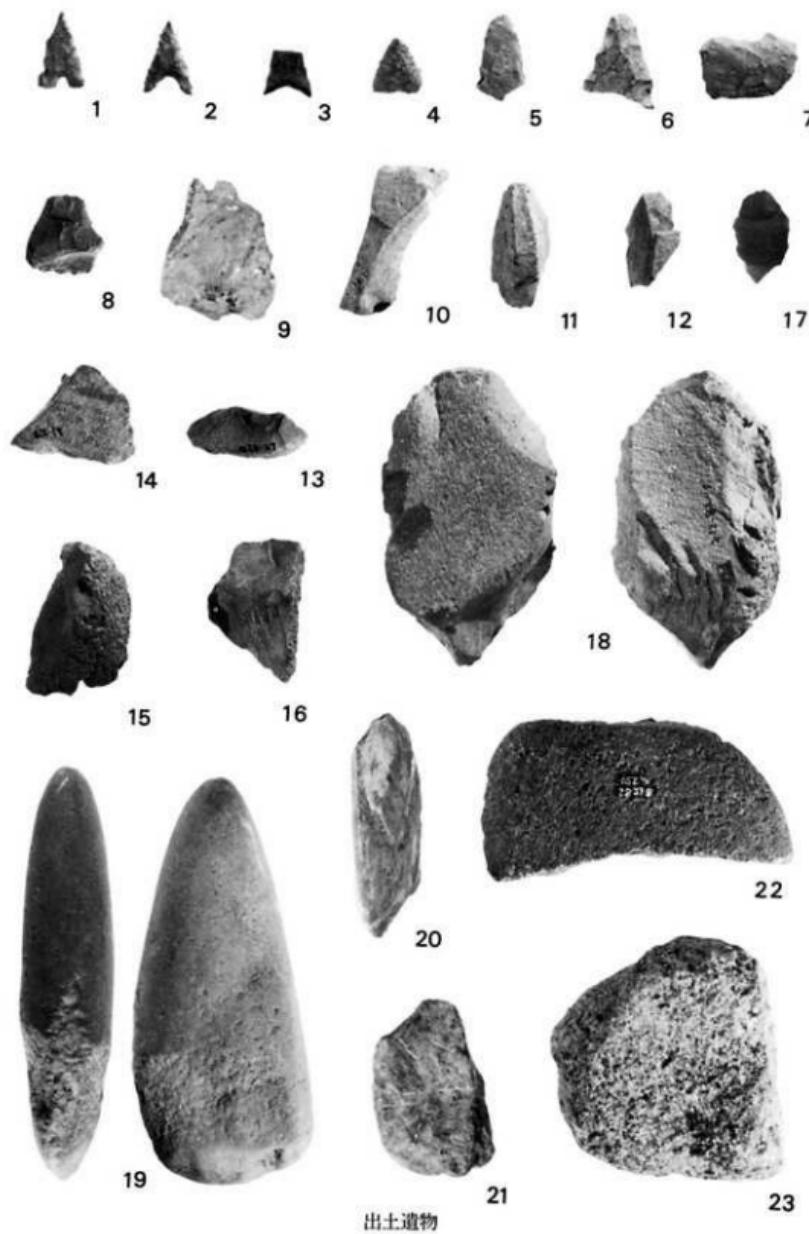


a 2区SK8遺物出土状況

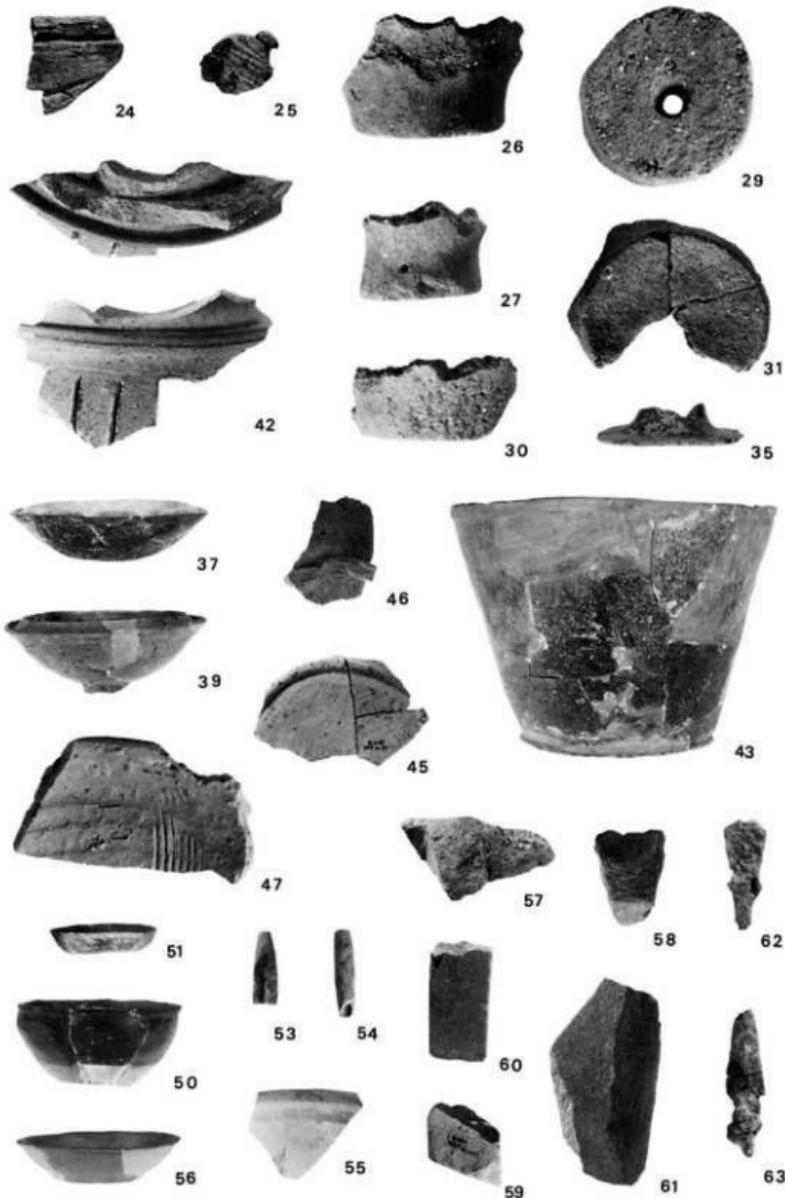


b 2区SB17円面観出土状況

図版 8



出土遺物



出土遺物

古江西第1号貝塚発掘調査報告
—広島市西区古江西町884番地
所在遺跡の調査—

昭和58年3月

編集・発行 徳広島県埋蔵文化財調査
センター

印 刷 広島産興株式会社